

進路選択における親子間コミュニケーションと大学生のアイデンティティ形成および親子関係認知の関連

白濱, あかね
九州大学大学院人間環境学府

江頭, 愛
福岡市子ども総合相談センター

五位塚, 和也
九州大学大学院人間環境学研究院

古賀, 聡
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2228889>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 18, pp.73-83, 2017-03-23. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

進路選択における親子間コミュニケーションと 大学生のアイデンティティ形成および親子関係認知の関連

白濱あかね 九州大学大学院人間環境学府
江頭 愛 福岡市子ども総合相談センター
五位塚和也 九州大学大学院人間環境学研究院
古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

Parent-child communication during adolescents' career decision making and its effect on identity and perceived parent-child relationship among university students

Akane Shirahama (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Ai Egashira (*Fukuoka city child synthesis consultation center*)

Kazuya Goitsuka (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Satoshi Koga (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The present study aimed to explore how parent-child communication changes during adolescents' career decision making and affects adolescents' identity. University students ($n = 172$) completed questionnaires on parent-child communication regarding high school and university entrance examinations, identity, and parent-child relationship. Concerning parents, communication about high school entrance examinations was higher than that about university entrance examinations at the level of "assertive attitude." Concerning children, communication about high school entrance examinations was higher than that about university entrance examinations at the level of "mutual attitude." Parent-child communication during career decision making was classified into "receptive parents," "controlling parents," and "mutual parents." In parent-child relationships, "controlling parents" were lowest in "gratitude to parents" and "individualization of parents." However, "controlling parents" were highest in "obedience toward parents," "repellence toward parents," and "separation from parents." Relationship between parent-child communication and identity was not determined. Hence, this study suggests that it is important for parents to have receptive attitude in parent-child communication during adolescents' career decision making.

Key Words: adolescent, parent-child communication, career decision making, parent-child relationship, identity

I 問題と目的

青年期には、児童期初期に匹敵するほどの急速な身体的変化と、全く新しく加わった身体的な性器的成熟のために、児童期とは異なる新たな連続性と普遍性の感覚を求め、確立していくことが課題とされている (Erikson, 1959)。しかしながら、思春期の子は内的気づきが低く、感情を言語化したり、何によってもたらされた感情であるかを整理したりすることは比較的難しい (水島, 2012)。このように、青年期は様々な変化に対応を迫られる時期である一方で、精神的に未発達な側面もあるため、青年が葛藤的な状況に陥りやすいと考えられる。

青年期には、親との関係性にも変化が生じると考えられる。青年期には、身体的アンバランスから情動の不安定感が生まれ、両親から独立したい欲求と相まって、第二次反抗期と呼ばれる反抗行動を起こしやすい (和田, 1993) とされている。中高生の時期は、親から独立した

い欲求が高まるものの、経済的にも情緒的にも親に依存せざるをえないため、親子関係における葛藤が高まると考えられる。Blos (1967) は、青年期の親子関係の発達的プロセスについて、「第2の個性化 (second individuation)」を提唱し、両親との結びつきを再確認する再接近期の重要性を指摘している。日本でも、落合 (1996) の心理的離乳の5段階過程仮説を提唱し、「第四段階—手を切る親子の関係」から、「第五段階—対等な親子関係」にかけての親子関係の移行は、青年期前期から後期にかけて起こることが明らかとしている。このことから、青年期は、親子間に生じる葛藤を調整し、新たに親との関係を再構築していくことが求められる時期であると考えられる。

青年期においては、親子の良好な関係を構築する手段として、親子間での会話、すなわち親子間コミュニケーションが考えられる。Minuchin (1974) は、家族構造は家族員の相互作用のあり方によって組織されると指摘し

ており、家族がシステムとして存続するためには、新たな環境の変化に合わせて新たな相互交流パターンを動員する柔軟性が必要であると述べている。相互交流パターンの変容が必要となる例として、Minuchin (1974) は青年期を挙げている。青年期には、「子どもの家庭外世界への参加と、その世界での子どもの地位とが増大する」ことから、「親サブシステムと彼との相互交流は、両親—子どもから両親—若いおとなへと変わるべき」であり、「もし家族に何の変化もないと、機能不全の傾向が現れ、それは葛藤が起こるたびに繰り返されるであろう」と示唆している。このように、青年期には、青年の変化に合わせた親子間コミュニケーションの変化が求められると考えられる。また、これまでの先行研究においても、親子間コミュニケーションが青年の発達に影響を与えることが示されている。例えば、親子間での親子間コミュニケーションが停滞している状態の例に、偽相互性が挙げられる。偽相互性とは、家族成員との交流の中で、自身の同一性の発達よりも家族全体の安定性を優先し、表面的に強く調和する関係を指す (Wynne, Ryckoff, Day, & Hirsch, 1958)。このような偽相互の関係では、自己同一性を保ちながら他者との関係を保つというバランスが崩れてしまい、相手のことを尊重しすぎるあまりに家族成員は自身の欲求を抑制しており、強い葛藤やストレスを抱えている可能性がある (井村・石田, 2012)。このように、家族間でのコミュニケーションのあり方が、青年の発達に影響を可能性が考えられる。

また、青年期には、親子関係の変容に加え、アイデンティティの確立という課題が課される。E. H. Erikson (1959) は、アイデンティティについて、青年期には、急速な身体的変化と全く新しい身体的な性器的成熟のために、児童期とは異なる新たな連続性と普遍性の感覚の確立が課題となることを指摘している。杉村 (1998) は、アイデンティティの形成において関係性を重視し、「自己の欲求・関心のみではなく他者の意見・期待も考慮したり、相談や討論といった形で他者を利用したり、自己と他者の視点の間の食い違いを交渉などの手段で解決しながら、人生の重要な選択を決定していくことである (杉村, 2001)」と述べている。このように、青年期のアイデンティティの形成には他者との関わりの中で他者視点を獲得することが不可欠であり、その意味でも青年にとって最も身近と言える親との関係性は重視されるべきであると考えられる。

青年期に特有の課題として、進路決定が挙げられる。進路決定は青年の人生に関わる重要な問題であり、「幼い頃に習得した役割や技術を職業にどう結びつけるか (Erikson, 1963)」という問題だけでなく、「親などの重要な他者から自分に向けられる期待や他者に対する自分の意味をいかに取り込むかという問題」(高橋, 2008)

も孕んでいる。高橋 (2008) は、進路選択時の親子間コミュニケーションと大学生のアイデンティティの関連を検討し、親の主張性と共感性が両方高い“相互交渉”タイプや、親の共感性だけが高い“応援”タイプは、両方低い“不明確”タイプより青年のアイデンティティ達成得点が高いことを示した。このように、進路選択場面における親子間コミュニケーションが青年のアイデンティティ発達に影響を与えることが示唆されている一方、進路選択時の親子間コミュニケーションがそれ以外の青年の発達に与える影響については検討がなされていない。

そこで、本研究では、青年期を中学生にあたる前期、高校生にあたる中期、大学生にあたる後期に分け、①前期と中期の進路選択場面における親子間コミュニケーションの変化、②青年期中期の進路選択場面における親子間コミュニケーションが青年期後期のアイデンティティ発達に与える影響に加え、親子関係認知に与える影響についても検討する。これまでの先行研究においても、親子関係認知の重要性が示唆されている。例えば、島 (2014) は、青年が親の養育態度をネガティブに評価していることが不安定な内的作業モデルにつながり、ひいては青年の社会不適応と関連がみられることを明らかにした。また、麻喜 (2010) では、家族に対して「愛情のある」、「あたたかい」などの「きずな」の強いイメージを持つ青年は「反社会的行動傾向」が有意に低くなる一方で、家族に対して「冷めた」、「孤独な」などの「きずな」の希薄なイメージを持つ青年は「反社会的行動傾向」、「非社会的行動傾向」がともに有意に高くなることが示された。このように、青年の親イメージが青年の発達に影響を与えることが考えられ、親子間コミュニケーションのあり方と青年の抱く親子関係認知の関連について検討することは有益であると考えられる。

久保田 (2009) は、中学生と大学生に対して母親との交流の違いについて検討した結果、青年については、中学生の方が自分の意見を主張し、自分と他者とを区別する「独自性」の傾向にあり、大学生は他者の意見を尊重する「結合性」の傾向にあることが示唆されている。また、母親については、大学生の母親の方が中学生の母親よりも自己主張が強く、中学生の母親は子どもが意見しやすいような提案をし、相手の要求に応える傾向があった。したがって、親子間コミュニケーションの発達の变化に関しては、「青年期前期には、親は共感性を高く示すのに対し、青年は主張性や議論の回避を高く示す。一方、青年期中期には、親子ともに主張性と共感性の両方を示すようになる」と考えられる (仮説1)。

また、Cooper et al. (1983) では、アイデンティティが健全な発達を遂げている高校生においては、共感性を中心とした会話の中で、家族内の個々の成員が独自の意見を表明するということが指摘されている。それに対し

て、アイデンティティが未発達な高校生は、親子間での意見の不一致を避け、共感性の高い会話が行われていることが明らかになった。したがって、進路選択における親子間コミュニケーションと青年のアイデンティティや親子関係認知の関連に関しては、「青年期中期に、親子間で共感性と主張性が高く示された場合には、青年期後期にアイデンティティの健全な発達を示し、肯定的な親イメージを抱く。その一方、親子間で極端に偏った主張性や共感性が示される場合や、議論を回避する傾向が高い場合には、青年のアイデンティティは未発達であり、否定的な親イメージを抱く」と考えられる（仮説2）。

II 方法

1. 調査協力者

2014年11月下旬から12月中旬にかけて、A大学の学部1、2年生から無作為に調査協力者を募集し、調査内容と目的を説明した上で協力が得られた213名に、質問紙の回答を求めた。本研究では、大学受験時の親子間コミュニケーションが大学生のアイデンティティや親子関係に与える影響について検討することを目的のひとつとしている。よって、大学生生活の要因をできる限り排除するために、低学年の学生を調査対象とした。データに不備のない200名のうち、中高一貫校に通っていた28名をのぞく172名（男子79名、女子93名、平均年齢19.49歳）を分析対象とした。

2. 質問紙構成

1) 進路選択における親子間コミュニケーション尺度
高橋（2008）で用いられた尺度を参考に、進路選択場面での親の態度を捉える11項目から9項目、青年の態度を捉える13項目から11項目を因子負荷量の高い順に抽出し、高校受験時、大学受験時の親子間コミュニケーションについてそれぞれ尋ねた。「非常にあてはまる」5点から「全くあてはまらない」1点までの5件法で評定を求めた。本研究では、家庭状況に対する倫理的配慮として、父親と母親を区別せず、「親」と表現した。

2) アイデンティティ尺度
青年の現在のアイデンティティ発達について検討するために、アイデンティティ尺度（下山，1992）の20項目を用いた。下位因子には「アイデンティティの基礎」と「アイデンティティの確立」がある。「非常にあてはまる」5点から「全くあてはまらない」1点の5件法で評定を求めた。

3) 親子関係認知尺度
青年の現在の親子関係について検討するために、親子関係尺度（岩男，2014）を参考に、調査対象者の負担を考慮し、25項目を抽出して使用した。「非常にあてはまる」5点から「全くあてはまらない」1点の5件法で評定を求めた。

III 結果

1. 各尺度についての因子分析

1) 進路選択場面における親の態度尺度（高校受験時）
高校受験時の進路選択場面における親の態度を表す9項目について、天井効果が見られた1項目を削除し、主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから3因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が.35に満たなかった、もしくは複数の項目で基準値を超えた1項目を削除し、再度因子分析を行ったところ、3因子が抽出された。結果をTable 1に示す。

第1因子は、「親は私が意見を言っている途中で反論することがあった」、「親は進路について『どうしてそうしたいの』と理由を聞いた」など、親が自分の独自の意見を表明し、議論を展開していく傾向がみられる3項目から構成されていたため、「主張的態度」因子と命名した（ $\alpha = .685$ ）。第2因子は、「親は私の入学試験について『大丈夫だよ』と励ましてくれた」、「親は私のやりたいことを理解したようだった」など、親が青年の意見に共感を示し、尊重する傾向がみられる2項目から構成されているため、「共感的態度」因子と命名した（ $\alpha = .494$ ）。第3因子は、「親に進路の相談をしても『よくわからない』と言われた」、「親は私が意見を言っても『いいんじゃない』と言うだけだった」など、親が進路の話を選び、青年に主張や共感を示さない傾向がみられる2項目から構成されていたため、「回避的態度」因子と命名した（ $\alpha = .419$ ）。

Table 1
進路選択における親の態度尺度因子分析結果
(高校受験時)

項目	I	II	III
I. 主張的態度 ($\alpha = .685$)			
5. 親が意見を言っている途中で反論することがあった	.845	-.119	-.084
8. 親は進路について「どうしてそうしたいの」と理由を聞いた	.669	.236	.092
3. 親は「将来こんな仕事についてほしい」と言った	.485	-.002	-.081
II. 共感的態度 ($\alpha = .494$)			
9. 親は私の入学試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれた	.106	.692	.072
6. 親は私のやりたいことを理解したようだった	-.028	.486	-.127
III. 回避的態度 ($\alpha = .419$)			
7. 親に進路の相談をしても「よくわからない」と言われた	.143	-.191	.615
4. 親は私が意見を言っても「いいんじゃない」と言うだけだった	-.239	.112	.523
因子間相関	II	-.045	
	III	.058	-.174

2) 進路選択場面における青年の態度尺度 (高校受験時) 高校受験時の進路選択場面における青年自身の態度を表す 11 項目について主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから 2 因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が .35 に満たなかった、もしくは複数の項目で .35 を超えた 4 項目を削除し再度因子分析を行ったところ、2 因子が抽出された。結果を Table 2 に示す。

第 1 因子は、「親と進路について話す時はなるべく早く終わらせようとした」、「私は親との進路について話し合うのをなるべく避けていた」など、青年が親と議論することを避ける傾向が見られる 3 項目から構成されていたため、「回避的態度」因子と命名した ($\alpha = .731$)。第 2 因子は、「親が私の進路に反対した時、反対する理由を尋ねた」、「私の将来について親が心配する時は安心させようとした」など、青年が親と積極的に進路についての議論を展開させたり、親の気持ちに寄り添ったりする傾向がある 4 項目から構成されていた。この因子は、先行研究では「議論による立場の明確化」と「結合性」の 2 因子に分かれていたが、本研究ではその二つがまとまった形で、親子の相互的な議論の展開を示すと捉えられたため、「相互的態度」と命名した ($\alpha = .672$)

3) 進路選択場面における親の態度尺度 (大学受験時) 大学受験時の進路選択場面における親の態度を表す 9 項目について、天井効果がみられた 1 項目を削除し、主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから 3 因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が .35 に満たなかった、もしくは複数の項目で .35

を超えた 1 項目を削除し再度因子分析を行ったところ、3 因子が抽出された。結果を Table 3 に示す。

第 1 因子は、「親は私が意見を言っている途中に反論することがあった」など、親が青年に対して、自分の独自の意見を表明する傾向が見られる 3 項目から構成されていたため、「主張的態度」因子と命名した ($\alpha = .646$)。第 2 因子は、「親は私の入学試験について『大丈夫だよ』と励ましてくれた」など、親が青年の意見を尊重し、応援する傾向が見られる 2 項目から構成されていたため、「共感的態度」因子と命名した ($\alpha = .584$)。第 3 因子は、「親は私が意見を言っても『いいんじゃない』と言うだけだった」など、親が進路についての話が深まることを避けたり、子の話に意見や共感を示さなかったりする傾向が見られる 2 項目から構成されていたため、「回避的態度」因子と命名した ($\alpha = .568$)。

4) 進路選択場面における青年の態度尺度 (大学受験) 大学受験時の進路選択場面における青年自身の態度を表す 11 項目について、天井効果がみられた 1 項目を削除し、主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから 2 因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が .35 に満たなかった、もしくは複数の項目で .35 を超えた 4 項目を削除し再度因子分析を行ったところ、2 因子が抽出された。結果を Table 4 に示す。

第 1 因子は、「私は親と進路について話し合うのをなるべく避けていた」など、青年が親と議論することを避けたり、親の意見を聞かなかったりする傾向が見られる 4 項目から構成されていたため、「回避的態度」因子と

Table 2
進路選択における青年の態度尺度因子分析結果
(高校受験時)

項目	I	II
I. 回避的態度 ($\alpha = .731$)		
5. 親と進路について話す時はなるべく早く終わらせようとした	.824	-.015
1. 私は親と進路について話し合うのをなるべく避けていた	.735	-.071
9. 親の進路についての意見は聞くふりだけした	.525	.139
II. 相互的態度 ($\alpha = .672$)		
6. 親が私の進路に反対した時、反対する理由を尋ねた	.156	.737
7. 私の将来について親が心配する時は安心させようとした	.050	.577
2. 親が進路について反対したら、認めてもらえるよう説得した	.024	.537
10. 私は自分の進路を希望する理由を親に説明した	-.268	.515
11. 私は親の立場になって自分の進路を考えてみた	.036	.369
因子間相関	II	.101

Table 3
進路選択における親の態度尺度因子分析結果
(大学受験時)

項目	I	II	III
I. 主張的態度 ($\alpha = .646$)			
5. 親は私が意見を言っている途中に反論することがあった	.836	-.155	.052
8. 親は進路について「どうしてそうしたいの」と理由を聞いた	.595	.220	-.119
3. 親は「将来こんな仕事についてほしい」と言った	.499	.040	.054
II. 共感的態度 ($\alpha = .584$)			
9. 親は私の入学試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれた	.120	.790	.117
6. 親は私のやりたいことを理解したようだった	-.088	.539	-.168
III. 回避的態度 ($\alpha = .568$)			
4. 親は私が意見を言っても「いいんじゃない」というだけだった	-.134	.094	.747
7. 親に進路の相談をしても「よくわからない」と言われた	.136	-.091	.575
因子間相関	II	-.109	
	III	-.297	-.190

命名した ($\alpha = .815$)。第2因子は、「親が私の進路に反対した時、反対する理由を尋ねた」、「私は親の立場になって自分の進路について考えた」などのように、青年が親と積極的に進路についての議論を展開させたり、親の気持ちに寄り添ったりする傾向がある5項目から構成されていたため、高校受験時の青年の態度尺度にならない、「相互的態度」と命名した ($\alpha = .672$)。

5) 親子関係認知尺度 青年が認知した親子関係を表す25項目について主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから5因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が.35に満たなかった、もしくは複数の項目で.35を超えた9項目を削除し再度因子分析を行ったところ、5因子が抽出された。結果をTable 5に示す。

第1因子は、「最近、親のありがたみを感じるがある」など、親への感謝やいたわり、尊敬を示す4項目で構成されていたため、「親への感謝」因子と命名した ($\alpha = .705$)。第2因子は、「親に逆らえないで言う通りになってしまいやすい」など、青年が自分の意志で物事を選択できず、親の意見に従ってしまうことが表れた4項目で構成されていたため、「親への従順」因子と命名した ($\alpha = .689$)。第3因子は、「私の意見や考え方が親に伝わらずイライラすることがある」など、親の考え方

や価値観と対立してしまう傾向が見られる3項目で構成されていた。「自分でも気づかないうちに親と考えが似てしまっている」は、親の価値観が青年に反映されてい

Table 4
進路選択における青年の態度尺度因子分析結果
(大学受験時)

項目	I	II
I. 回避的態度 ($\alpha = .815$)		
1. 私は親と進路について話し合うのをなるべく避けていた	.862	-.044
5. 親と進路について話す時はなるべく早く終わらせようとした	.829	.021
9. 親の進路についての意見は聞くふりだけした	.636	-.004
II. 相互的態度 ($\alpha = .613$)		
2. 親が進路について反対したら、認めてもらえるよう説得した	.020	.689
6. 親が私の進路に反対した時、反対する理由を尋ねた	.130	.633
10. 私は自分の進路を希望する理由を親に説明した	-.145	.571
11. 私は親の立場になって自分の進路を考えてみた	.025	.506
7. 私の将来について親が心配する時は安心させようとした	-.052	.431
因子間相関	II	.133

Table 5
親子関係尺度因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V
I. 親への感謝 ($\alpha = .705$)					
24. 最近、親のありがたみを感じるがある	.818	-.145	.079	-.049	-.051
14. 親に対して親孝行をした	.765	.067	-.027	.149	.023
4. 親をいたわってあげたい	.688	.139	-.025	.145	-.056
7. 私にとって親は理想の大人だと思う	.410	-.010	-.031	-.439	-.012
II. 親への従順 ($\alpha = .689$)					
8. 親に逆らえないで言う通りになってしまいやすい	.165	.742	.073	.076	-.182
3. 自分の意見と親に意見が違う時、親の意見に左右される	.017	.637	.166	-.201	.190
23. 親の言う通りに生きている	-.240	.594	-.029	.022	-.106
13. 親の言うことには素直に従っている	.048	.463	-.416	-.059	.138
III. 親への反発 ($\alpha = .676$)					
18. 自分でも気づかないうちに親と考えが似てしまっている	.084	.018	.879	-.272	.012
2. 私の意見や考え方が親に伝わらずイライラすることがある	.015	.094	.569	.245	.151
12. 私と親の言うことはいつも対立する	-.165	.183	.514	.113	-.158
IV. 親との分離 ($\alpha = .696$)					
10. 自分の生き方は親の生き方とは別の独自のものだ	.070	-.049	-.053	.693	-.006
20. 親と私の人生は違う	.206	-.015	.035	.658	.067
V. 親の個別化 ($\alpha = .651$)					
5. 親も一人の人間だと思って接している	-.100	-.058	-.022	-.027	.794
15. 親には親の考え方がある	.006	-.048	.145	.245	.732
11. 自分の価値観には親の価値観が反映している	.165	.082	-.111	-.207	.402
因子間相関	II	-.058			
	III	-.346	.044		
	IV	.106	-.364	.110	
	V	.618	-.107	-.363	.128

るかを測定する項目として意図していたが、文末の表現などから否定的な項目と捉えられた可能性がある。よって、この因子を「親への反発」因子と命名した ($\alpha = .676$)。第4因子は、「自分の生き方は親の生き方とは別の独自のものだ」など、親を自分とは異なる存在として捉え、自分の存在や生き方を独自のものとする傾向が見られる2項目で構成されていたため、「親との分離」因子と命名した ($\alpha = .696$)。第5因子は、「親も一人の人間だと思って接している」など、親を自分とは異なる一人の人間と捉え、その考えや価値観を尊重する傾向が見られる2項目で構成されていたため、「親の個性」因子と命名した ($\alpha = .651$)。

6) 青年のアイデンティティ尺度 青年のアイデンティティを表す20項目について主因子法を用いて因子分析を行った。スクリープロットから2因子を妥当と考え、プロマックス回転を行った。因子負荷量が.35に満たなかった、もしくは複数の項目で.35を超えた8項目を削除し再度因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。結果をTable 6に示す。

第1因子は、「私は魅力的な人間に成長しつつある」、「私は十分に自分のことを信頼している」など、自分への自身や信頼を含めた、青年期後期の発達課題と考えられる、個性、主体性、社会性の確立を示す6項目で構成されていた。よって、この因子を先行研究にない、「ア

イデンティティの確立」尺度と命名した ($\alpha = .799$)。第2因子は、「自分の中には、常に漠然とした不安がある」「私の心は、とても傷つきやすく、もろい」など、発達早期の基本的信頼や自律性にかかわる内容であり、対人場面における不安などの情緒的側面を示す6項目で構成されていた。よって、この因子を先行研究にない、「アイデンティティの基礎」因子と命名した ($\alpha = .738$)。

2. 高校受験時と大学受験時の親子間コミュニケーションの比較

1) 高校受験時と大学受験時の親の態度の比較 高校受験時と大学受験時で、親の態度にどのような違いが見られるかを検討するために、時期(高校受験時、大学受験時)を独立変数、進路選択場面における親の態度得点を従属変数とする、対応のある t 検定を行った。結果をFig.1に示す。「主張的態度」については、高校受験時の親の態度得点よりも大学受験時の親の態度得点の方が、有意に高かった ($t(170) = 3.581, p < .001$)。「共感的態度」($t(170) = .050$)と「回避的態度」($t(170) = .760$)については、有意な差は見られなかった。

2) 高校受験時と大学受験時の青年の態度の比較 高校受験時と大学受験時で、青年の態度にどのような違いが見られるかを検討するために、時期(高校受験時、大学受験時)を独立変数、進路選択場面における青年の態度得点を従属変数とする、対応のある t 検定を行った。結果をFig.2に示す。「相互的態度」については、高校受験時の青年の態度得点よりも、大学受験時の青年の態度得点の方が、有意に高かった ($t(170) = 5.661, p < .001$)。「回避的態度」($t(170) = .444$)については、有意な差は見られなかった。

3. 高校受験時の親子間コミュニケーションの類型化

高校受験時の親子間コミュニケーション得点について、Ward法による階層クラスタ分析を行った。その結果、各クラスタに属する人数、およびクラスタの解釈の可能性から、3つのクラスタによる分類を採用した。各クラスタを独立変数、高校受験時の親子間コミュニケーション得点を従属変数とする1要因の被験者間分散分析を行った結果、すべての因子において1%水準で有意差が見られたため、TukeyのHSD法による多重比較を行った。分散分析と多重比較の結果をFig.3に示す。

まず、親の態度を比較した結果を示す。「主張的態度」因子については、1%水準でクラスタ2が他の2群と比べて有意に得点が高かった ($F(2,167) = 25.612, p = .01$)。また、「共感的態度」因子については、1%水準でクラスタ3が他の2群と比べて有意に得点が高かった ($F(2,167) = 39.180, p < .01$)。さらに、「回避的態度」因子

Table 6

青年のアイデンティティ尺度因子分析結果

項目	I	II
I. アイデンティティの確立 ($\alpha = .799$)		
19. 私は魅力的な人間に成長しつつある	.861	-.114
5. 私は十分に自分のことを信頼している	.707	.035
9. 自分は何かをつくりあげることのできる人間だと思う	.671	-.076
15. 私は、自分の個性をととても大切にしている	.554	-.151
13. 自分にまとまりがでてきた	.510	.145
11. 社会の中での自分の生きがいが増えてきた	.509	.070
II. アイデンティティの基礎 ($\alpha = .738$)		
* 20. 自分の中には、常に漠然とした不安がある	-.106	.697
* 4. 私の心は、とても傷つきやすく、もろい	-.199	.636
* 12. 私はどうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じこもってしまう	.178	.591
* 10. 私は人が見ているとうまくやれない	-.091	.481
* 16. まわりの動きについていけず自分だけ取り残されたと感じることがある	.318	.475
* 2. 私はやりそこないをしなやかと心配ばかりしている	.106	.470
因子間相関	II	.359

※：逆転項目

については、1%水準でクラスタ3が最も有意に得点が低かった ($F(2,167) = 40.295, p < .01$)。

次に、青年の態度を比較した結果を示す。「相互的態度」因子については、1%水準でクラスタ1が他の群と比べて有意に得点が低かった ($F(2,167) = 14.828, p < .01$)。また、「回避的態度」因子については、1%水準で

クラスタ2が他の2群と比べて有意に得点が高かった ($F(2,167) = 63.101, p < .01$)。

クラスタ1の特徴として、親の態度については、「主張的態度」は他の2群と比べて低くなっているが、「共感的態度」に関しては高い値を示している。その一方、青年の態度については、「回避的態度」、「相互的態度」

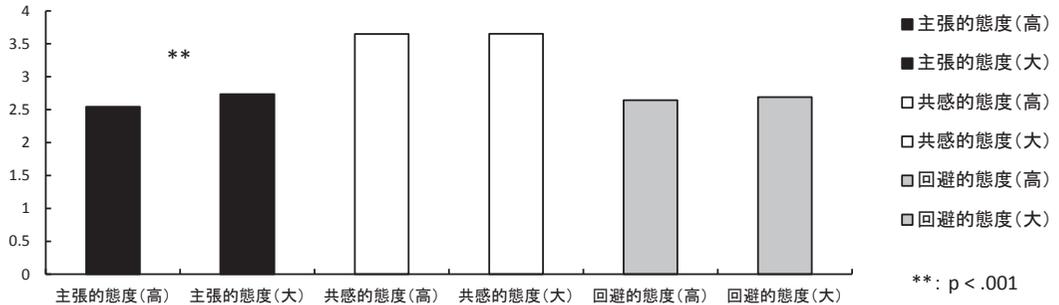


Fig.1 高校受験時と大学受験時の親の態度得点の平均値

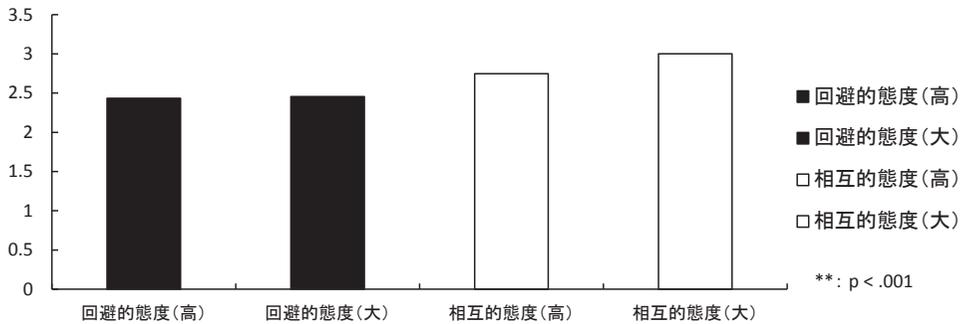


Fig.2 高校受験時と大学受験時の青年の態度得点の平均値

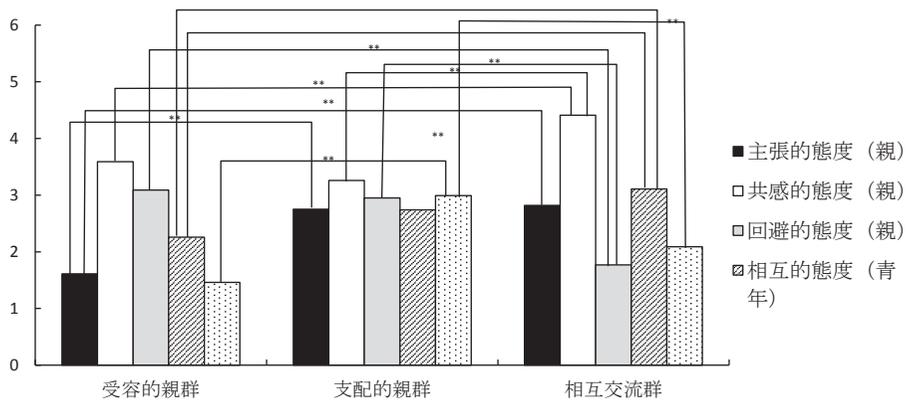


Fig.3 高校受験時の親子間コミュニケーションの類型と比較

が他の2群と比べて低い結果となっている。つまり、この群では親は自分の意見を言うことはあまりなく、青年の意見を受容する傾向があり、青年は親と相互的議論をする傾向が低いと考えられる。よって、この群を「受容的親群」と命名した。また、クラスタ2は、親の態度に関しては「主張的態度」がクラスタ1よりも有意に高く、青年の態度に関しては「回避的態度」が他の2群と比べて高い結果となっている。つまり、親が自分の意見を主張する傾向があり、青年は議論を避けることが特徴として考えられる。よって、この群を「支配的親群」と命名した。さらに、クラスタ3では、親の態度については「主張的態度」がクラスタ1よりも、「共感的態度」が他の2群よりも有意に高く、「回避的態度」が他の2群よりも有意に低い結果となっている。また、青年の「相互的態度」についても高い傾向が見られた。つまり、親子が積極的に意見交換し、互いの主張にある程度の理解を示していたと推測できる。よって、この群を「相互交流群」と命名した。

4. 大学受験時の親子間コミュニケーションの類型化

大学受験時の親子間コミュニケーション得点について、Ward法による階層クラスタ分析を行った。その結果、高校受験時のクラスタと同様、3つのクラスタによる分類を採用した。さらに、各クラスタを独立変数、高校受験時の親子間コミュニケーション得点を従属変数とする1要因の被験者間分散分析を行った結果、「親との相互性」因子以外で1%水準、「親との相互性」因子において5%水準で有意差が見られたため、TukeyのHSD法による多重比較を行った。分散分析と多重比較の結果をFig.4に示す。

まず、親の態度についての比較を示す。「主張的態度」因子については、1%水準でクラスタ2がクラスタ1よ

りも有意に得点が高かった ($F(2,166) = 7.386, p = .01$)。また、「共感的態度」因子については、1%水準でクラスタ2が他の2群と比べて有意に得点が低かった ($F(2,166) = 15.034, p < .01$)。さらに、「回避的態度」因子については、1%水準でクラスタ1が他の2群と比べて有意に得点が高く、クラスタ2がクラスタ3よりも有意に得点が高かった ($F(2,167) = 40.295, p < .01$)。

次に、青年の態度の比較について示す。「相互的態度」因子については、有意な差は見られなかった。また、「回避的態度」因子については、1%水準で、クラスタ2が他の2群よりも有意に得点が高かった ($F(2,166) = 52.03, p < .01$)。

大学受験時のクラスタは、高校受験時のクラスタの構造と類似していた。したがって、高校受験時のクラスタ名にならない、クラスタ1を「受容的親群」、クラスタ2を「支配的親群」、クラスタ3を「相互交流群」と命名した。

5. 大学受験時の親子間コミュニケーションの類型と親子関係認知の関連

大学受験時の親子間コミュニケーションと青年の親子関係認知の関連について検討するために、大学受験時の親子間コミュニケーションの類型を独立変数、親子関係得点を従属変数とする1要因被験者間分散分析を行った。その結果、すべての因子で1%水準で有意差が見られたので、TukeyのHSD法による多重比較を行った。結果をTable 7に示す。「親への感謝」因子においては、1%水準で有意な差が見られた ($F(2,166) = 12.45, p < .01$)。多重比較の結果、「支配的親群」が1%水準で「受容的親群」と「相互交流群」より有意に得点が低かった。「親への従順」因子においては、1%水準で有意な差が見られた ($F(2,166) = 5.49, p < .01$)。多重比較の結果、「受

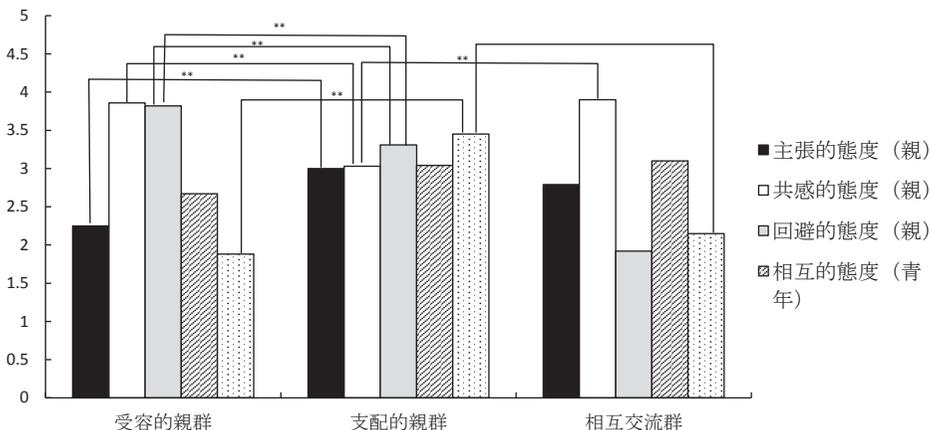


Fig.4 大学受験時の親子間コミュニケーションの類型

容的親群」より「支配的親群」の方が1%水準で有意に得点が高かった。「親への反発」因子においては、1%水準で有意な差が見られた ($F(2,166) = 6.90, p < .01$)。多重比較の結果、「支配的親群」が他の群よりも1%水準で有意に得点が高かった。「親との分離」因子においては、5%水準で有意な差が見られた ($F(2,166) = 4.41, p < .05$)。多重比較の結果、「受容的親群」が他の群よりも5%水準で有意に得点が高かった。「親の個別化」因子においては、1%水準で有意な差が見られた ($F(2,166) = 9.37, p < .01$)。多重比較の結果、「支配的親群」が他の群よりも1%水準で有意に得点が低かった。

Table 7

クラスタの類型による青年の親子関係得点の比較						
因子	クラスタ	N	M	SD	F	多重比較
親への感謝	1 受容的親群	36	3.78	.59	12.45**	2 < 1, 3
	2 支配的親群	47	3.34	.51		
	3 相互交流群	86	3.91	.71		
親への従順	1 受容的親群	36	2.39	.84	5.49**	1 < 2
	2 支配的親群	47	2.94	.63		
	3 相互交流群	86	2.71	.77		
親への反発	1 受容的親群	36	2.67	1.12	6.9**	1, 3 < 2
	2 支配的親群	47	3.40	.64		
	3 相互交流群	86	3.00	.92		
親との分離	1 受容的親群	36	4.31	.60	4.41*	2, 3 < 1
	2 支配的親群	47	3.80	.74		
	3 相互交流群	86	3.88	.95		
親の個別化	1 受容的親群	36	3.83	.79	9.37**	2 < 1, 3
	2 支配的親群	47	3.40	.70		
	3 相互交流群	86	3.95	.66		

6. 大学受験時の親子間コミュニケーションの類型とアイデンティティの関連

大学受験時の親子間コミュニケーションと青年のアイデンティティの関連について検討するために、大学受験時の親子間コミュニケーションの類型を独立変数、青年のアイデンティティ得点を従属変数とする1要因被験者間分散分析を行った。結果をTable8に示す。「アイデンティティの基礎」、「アイデンティティの確立」のどちらの因子においても有意な差は見られなかった。($F(2, 166) = 1.378, n.s.$, $F(2,166) = .503, n.s.$)。

Table 8

クラスタの類型による青年のアイデンティティ得点の比較						
因子	クラスタ	N	M	SD	F	
アイデンティティの基礎	1 受容的親群	36	1.93	.78	1.38	
	2 支配的親群	47	1.66	.53		
	3 相互交流群	86	1.78	.83		
アイデンティティの確立	1 受容的親群	36	3.31	.66	.50	
	2 支配的親群	47	3.22	.59		
	3 相互交流群	86	3.17	.81		

IV 考察

1. 高校受験時と大学受験時の親子間コミュニケーションの比較について

1) 高校受験時と大学受験時の親の態度の比較 高校受験時と大学受験時の親子間コミュニケーションを比較した結果、親の態度については、大学受験時が高校受験時よりも「主張的態度」が有意に高いことが示された。つまり、本研究では、高校受験時よりも大学受験時の方が、親が自分の意見を主張する傾向が高いことが示され、仮説1と合致する結果となった。久保田(2009)では、大学生の母親は中学生の母親と比較して、子どもに対する自己主張が強い傾向があった点について、大学生の母親は子どもを対等な相手として捉えているため、自身の意見を主張することで問題解決をしようとしていると推測している。これは、落合(1996)において、大学生の時期は、子が心理的に親と対等となる「第五段階—対等な親子関係」とされていることと一致する。また、高校受験時と比較して大学受験時は、選択する大学によっては学費が莫大になり、場合によっては青年が一人暮らしを始める可能性もあるなど、家族全体に大きな影響を与えるため、親が青年に意見することが多くなると考えられる。

その一方、「共感的態度」と「回避的態度」では、有意な差が見られなかった。「共感的態度」に関しては、仮説1とは異なる結果となった。この理由としては、進路選択という青年の今後の人生に関わる非常に重要な場面においては、青年の成長の程度にかかわらず、親は青年の考えに理解や励ましを与えることが推測される。また、「回避的態度」においては、高校受験は、大学受験と比較すると家計や家族の今後に関する影響が少ないため、親が青年の進路決定に意見することが少ないとも考えられる。一方、大学受験は、学部選択などの問題や就職や研究、資格などより専門的な議論が展開されることが予想され、親が青年の意見を理解できず、議論が停滞する可能性が示唆される。そのため、高校受験時と大学受験時では、「回避的態度」において有意な差が見られなかったと考えられる。

2) 高校受験時と大学受験時の青年の態度の比較 高校受験時の親子間コミュニケーションと大学受験時の親子間コミュニケーションを比較した結果、青年の態度においては、大学受験時の方が高校受験時よりも「相互的態度」が高いことが示された。つまり、本研究では、大学受験時の方が高校受験時よりも親との相互的な議論が生じることが示唆され、仮説1と合致する結果となった。青年期中期にあたる大学受験時は、青年の将来観や職業観も発達するため、自分の意思を明確に言語化し、親に伝えることができると考えられる。また、西平(1990)

では、青年期中期から後期にかけての時期を第二次心理的離乳の時期としており、この時期では第一次心理的離乳で培った自律性が強調され、子どもは親を客観的に眺め、関係を修復していくと述べられている。そのため、高校受験時に比べ、大学受験時には青年が親の状況や心境に目を向け、親に配慮する傾向が高くなったと考えられる。さらに、大学受験は家族全体に関わる問題であるため、親に相談しようとする意識も高まることや、親が青年を対等の存在として扱い、自分の意見を出すようになることなどが、青年の相互的態度を高める要因として考えられる。この結果、高校受験時と比較して大学受験時の方が、青年が親と相互的な日論を展開する傾向が高くなったと推察される。

本研究では、因子分析の段階で「独自性」と「結合性」にあたる因子が抽出されず、その二つの要素を統合した「相互的態度」因子として抽出されたので、先行研究との比較が難しい。今後は、対象の人数を増やすなどして高い信頼性を保った上で、検討していく必要があると考えられる。しかしながら、この結果から、進路選択における親子間コミュニケーションにおける青年の主張性と共感性は密接した概念であることが推察され、両者の関連について詳細に検討していく必要があると考えられる。

一方、「議論の回避」については有意な差が見られなかった。高校受験にしても大学受験にしても、経済的にも物理的にも親に依存することには変わりはないため、親との議論はある程度必要となることが考えられる。一方で、高校受験時は反抗期にあたること、高校の選択は家族にそれほど影響がないことなどが、青年が議論を回避する傾向を高め、大学受験時は進路決定における専門性が高まることで、親への説明の回避につながると推察される。そのため、この両者が相殺しあい、有意な差が示されなかったと考えられる。

2. 大学受験時の親子間コミュニケーションと親子関係認知の関連について

大学受験時の親子間コミュニケーションと大学生の親子関係の関連を検討した結果、親子関係尺度のすべての因子において有意差が見られた。まず、受容的親群は、「親への感謝」と「親の個別化」が支配的親群より、「親との分離」が他の2群より高く、「親への反発」が支配的親群よりも低いという結果になった。また、支配的親群は、「親への従順」が受容的親群より、「親への反発」が他の2群より高く、その一方で、「親との分離」が受容的親群より、「親への感謝」と「親の個別化」が他の2群より低いという結果になった。さらに、相互的親群では、「親への感謝」と「親の個別化」が支配的親群よりも高く、「親への反発」が支配的親群より、「親との分

離」が受容的親群よりも低いという結果になった。これらのことから、受容的親群や相互交流群のような親の共感的態度が高い群では、青年が親に対して感謝や尊重などの肯定的なイメージを抱きやすくと考えられる。その一方で、支配的親群のように親が意見を主張する傾向が強い群では、青年が親に対して反発などの否定的なイメージを抱きやすく、感謝や尊重などの肯定的なイメージを抱きにくいことが推測される。高橋(2008)では、青年のアイデンティティの感覚にとっては、母親や父親が示す「結合性」は「独自性」よりも重要であることが示されている。また、平石(2000)においても、後期青年の親子関係において、独自性が発揮されることが必ずしも肯定的な意味をもつわけではないとされている。このように、先行研究においても親子間のコミュニケーションにおいては独自性よりも結合性の側面が重要視されており、親の受容的な態度が青年の肯定的な親イメージに影響を与えることが推察される。

3. 大学受験時の親子間コミュニケーションとアイデンティティの関連について

大学受験時の親子間コミュニケーションと大学生のアイデンティティの関連を検討した結果、アイデンティティ尺度のどの因子においても有意な差は見られなかった。この結果について、青年期後期にあたる大学生のアイデンティティは、友人や教師、恋人などの親以外の重要な他者からの影響が強いことが推察される。北村(2008)が「成人になると、恋人や配偶者といった親密なパートナーが親に代わって主要な愛着対象としての役割を担うようにある」と述べているように、大学生の愛着対象は親以外の他者へと移行する可能性が示唆されている。また、「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである(杉村, 1998)」とあるように、アイデンティティは、他者との視点の違いに気づき、調整していく体験から構築される。今回は、進路選択場面で親と意見の食い違いを調整していく経験が青年のアイデンティティに影響を及ぼすという仮説を検証したが、実際には、身近な存在である親との考え方や価値観との相違を発見し、新たな視点を得るといった体験は生じにくい可能性が高い。それ故に、今回の研究では、親子間コミュニケーションのあり方と青年のアイデンティティに有意な関連が見られなかったと推察される。

しかし、高橋(2008)では、進路選択における親子間コミュニケーションが青年のアイデンティティと関連があることが示唆されている。よって、先行研究との相違を考察する必要がある。まず、今回の研究では、サンプル数が少なく、信頼性の高い結果であるとは言いがた

い。また、本研究では、青年の態度に関する因子が独自性と結合性を区別しない「相互的態度」因子として抽出されており、青年の独自性の高低、結合性の高低が測定できていない。青年の独自性や結合性の表出が青年のアイデンティティと関連がある可能性が高いため、今後は改善が必要な部分であると考えられる。

4. 今後の課題

最後に、本研究の課題について言及する。第一に、本研究では、大学生に過去の高校受験、大学受験時の回想をしてもらう手法をとっているため、実際に進路選択場面で行われたコミュニケーションが今回の研究結果に反映されているとは断定できない。今後は、実際に高校受験や大学受験を迎える中高生を対象に実証的な研究を行なう必要がある。第二に、本研究では青年の認知したコミュニケーションを研究対象としており、親の認知は反映されていない。今後は、親から見た進路選択時の青年、親の態度を検討する必要があると考えられる。第三に、本研究では、質問紙調査による量的研究であったため、進路選択場面における親子間コミュニケーションの様相の細部について把握することができなかった。実際は進路選択時の親子間コミュニケーションという単一の要因だけが、青年の親子関係やアイデンティティと関連を示すわけではない。今後は、青年や家族成員の特性などコミュニケーションが行われた背景にも着目して、研究を展開していく必要がある。

引用文献

- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186
- Cooper, C. R., Grotevant, H. D., & Condon, S. M. (1983). Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family*. New Directions for Child Development, No.22. Jossey-Bass, San Francisco., 43-59
- Erikson, E. H.(1959). *Identity and the lifecycle*. New York: W. W. Norton & Company Reissue, 1 小此木啓吾訳・編, 1973, 自我同一性, 誠信書房
- Erikson, E. H.(1963). *Child and society*. New York: W. W. Norton & Company Reissue, 仁科弥生訳, 1977, 幼児期と社会 I・II, みすず書房
- 平石賢治(2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連, 家族心理学研究, **14**(1), 41-59
- 井村文香, 石田弓(2012). 家族成員間の性質と青年の自己表現との関連—家族の偽相互性の観点から—, 広島大学心理学研究, **12**, 217-232
- 岩男尚美(2014). ソシオドラマにおける役割交換法が大学生の親子関係認知に与える影響, 心理劇研究, **38**, 西日本心理劇学会
- 北村琴美(2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連—, 心理学研究, **79**(2), 116-124
- 久保田桂子(2009). 青年期の母娘関係の発達差—会話による青年期前期と後期の交流の比較—, 教育心理学, **40**,
- 麻喜総一郎(2010). 家族イメージと青年期における不適応傾向との関係について—形容詞評定尺度の構成をとおして—, 家族心理学研究, **24**(1), 16-29
- Minuchin, S.(1974). *Family and Family Therapy*, 『家族と家族療法』, 誠心書房
- 水島広子(2012). 思春期の意味に向き合う—成長を支える治療や支援のために—, 岩崎学術出版社
- 西平直喜(1990). 成人になること, 東京大学出版会
- 落合良行, 佐藤有耕(1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程と分析, 教育心理学, **44**, 11-22
- 島 義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか: 内的作業モデルの媒介効果, 発達心理学研究, **25**(3), 260-267
- 下山晴彦(1986). 大学生の職業未決定の研究, 教育心理学研究, **34**, 20-30
- 下山晴彦(1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—, 教育心理学, **40**, 121-129
- 杉村和美(1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し, 発達心理学研究, **9**(1), 45-55
- 杉村和美(2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ研究: 2年間の変化とその要因, 発達心理学研究, **12**(2), 87-98
- 高橋 彩(2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連, パーソナリティ研究, **16**(2), 159-170
- 和田 実(1993). 同性友人関係: その性および性別役割タイプによる差異, 社会心理学研究, **8**, 67-75
- Wynne, L, Ryckoff, I, Day, J., & Hirsch, S. (1958). Pseudo mutuality in the family relation of schizophrenics, *Psychiatry*, **21**, 205.